

コメント：鎌倉彫資料館の連携活動と今後の展開

著者	金山 喜昭
出版者	法政大学資格課程
雑誌名	法政大学資格課程年報
巻	9
ページ	30-30
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00023058

コメント：鎌倉彫資料館の連携活動と今後の展開

法政大学キャリアデザイン学部教授 金山喜昭

鎌倉彫資料館は、昭和 52 年に鎌倉彫協同組合が「鎌倉彫収蔵庫」として設立したことに遡る。平成 17 年に鎌倉彫会館内に移転して現在の館名を名乗るようになって以降、主に組合員の教室や展示会などの場所として人々に親しまれてきたが、施設の老朽化や入館者の減少化などが課題となっていた。そこで、鎌倉彫協同組合により資料館の展示リニューアル、ショップやカフェの開設、ギャラリーの改修など全面的なリニューアルが行われた。

リニューアルの様子やその後の資料館の活動状況については、同館学芸員の田村沙理氏が詳しく紹介されているので、ここではリニューアル以降に始められた資料館をめぐる地域との連携について若干コメントしたい。

近年、公立博物館では「地域の連携」の必要性が強調されるが、実際のところはなかなか進んでいるとはいえない。その理由はいろいろあるだろうが、行政の縦割り組織の弊害などが障害要因となっているように思われる。

それに比べて、同館の連携先は実に多岐に及んでいる。鎌倉市からの青少年育成補助金「伝統工芸の人材育成」（商工課）、修学旅行生の受け入れ（観光課）、「こども鎌倉彫」の広報（教育委員会）の事業などのように、地域の伝統工芸である鎌倉彫の後継者育成や普及啓発をはかる取り組みは、鎌倉市にとっても伝統工芸の保存・継承や産業の振興をはかる政策や施策と符合する。同館の活動と自治体による「まちづくり」事業が整合し得ることを表している。

また、同館では鎌倉市内の文化施設とのネットワーク形成もはかられている。田村氏と鎌倉歴史文化交流館の学芸員が音頭をとり、県立、市立、私立の 10 館（20 人）ほどの学芸員たちによる情報交換会が行われている。その会合の中から共同企画の事業に発展することがあるという。昨年は、鎌倉歴史文化交流館の企画展「鎌倉グルメ」で出土漆器に関連する連携協力や、川喜多映画記念館が受け入れた職業体験ワークショップでは、田村氏が鎌倉彫漆器の取り扱い、キャプション作成の体験を実施した。こうしたネットワーク形成は、義務的に実施しても継続、発展するものではなく、有志が集まり議論風発する中からアイデアや、やる気のような気風が生まれるものである。

しばしばネットワークを維持、発展させるためには、いつでも集まることのできる拠点的な場所が必要だとされるが、会合には同館のカフェが使われている。市職員（商工課、観光課等）の送別会などにも使われるというように、資料館は地域の拠点になりつつあるようである。

商店街との連携は、鎌倉彫会館の外壁に看板を設置

し、商店会加入店舗を掲載したパンフレットを配布するなどして商店会の情報発信をしている。公立博物館では平等性が問われることから、一部の商店を取り上げて広報宣伝することができないが、民間にはそうしたサービスができる強みがあり、地域の風通しをはかることができるのである。

少子高齢化やそれに伴う人口減少は、消費人口と労働人口の減少により経済規模の縮小をまねいている。地域に目を転じれば、地域やコミュニティを構成する人たちの高齢化により、コミュニティそのものが先細り、コミュニティ相互のつながりも薄れて地域内のそれぞれのコミュニティの孤立化が拡大している。どここの土地にも地域にまつわる人々の生活や文化、歴史がある。地域の博物館は、その特性を発揮することにより、地域のコミュニティを繋ぎ、コミュニティ自体はもとより、地域全体を活性化させることに寄与することができる。近年、博物館には、そうした問題を解決するために、地域に開かれた存在として、コミュニティのネットワークを通じて、地域の活性化をはかることがもとめられている。

鎌倉彫資料館はリニューアルを契機にして、それまでの組合員や愛好家など、どちらかといえば特定の人たちを対象にしてきた内向き指向から、連携活動による様々な地域のコミュニティとの関係性をつくり、鎌倉彫を外部発信する外向き指向に転換したことは大きな進路変更だといえる。同館のように自治体や博物館、商店街などとの連携活動は、地域のコミュニティをつなぐ役割を果たしているし、そうしたコミュニティの結合関係は面的に広がりをもち地域の活性化に寄与することができる。一般的に、コミュニティ同士の信頼や互酬的關係のチャンネルが多いほど地域の社会関係資本は厚みをもち、豊かな地域社会を形成する。

地域の生活を安定的に維持するために、社会教育や文化活動の価値は大きなものがある。博物館は出自や学歴、職業などにとらわれずに、誰でも参加し共同に何かをすることでつながり合うことができる場である。今日、個人が展示を鑑賞する機会は多いが、仲間による共同作業をすることが少なくなっている。しかし、地域の社会関係資本を構築するためには、日常的な何気ない多様な人々の付き合いはとても大事である。博物館では市民参加型の事業として、観察会、研究会、製作、展示などを市民グループが実施しているところがある。または、ボランティア活動のように、博物館業務を市民がサポートすることも行われている。今後、同館でも事情が許せばグループ活動に参加することが保証されるような方法を見出すことができるとよいと思う。